書き言葉における文頭の And

海寶康臣

Abstract

This paper examines sentence-initial *And* in written language. It is claimed that（ⅰ）M-implicature in Levinson（2000）arises from the use of sentence-initial *And*,（ⅱ）the use of sentence-initial *And* can M-implicate the establishment of a coherence relation called "joint" in Mann and Thompson（1988）and（ⅲ）when a sentence begins with *And*, the sentence must not represent information that readers can obtain in the preceding discourse. *

キーワード：文頭の And，M 推意，一貫性，joint，慣習的前提

1. はじめに

本稿では書き言葉において文頭で使用される And（以下単に文頭の And と呼ぶ）について考察を行う。文頭の And は，英語のライティングの授業では，積極的に使用することが勧められることがなく，使用を控えるよう指示されることの方が多いようである。[1] この状況は，英語論文の指南書や文法書の影響なのかもしれない。英語論文の指南書の中に，(1) に示すように文頭の And の使用を控えるよう促しているものがある。

（1）［but, and, so, because 等の接続詞で sentence を始めないということ］は日本人に限らずアメリカ人の学生もよく注意される点である。ただ，多くの本を読むとこのような接続詞で始まっている sentence が現実にたくさんある。確かに，こなれた文章を書く人の場合，わざと接続詞で sentence を始めることもあるが，論文等では避けたほうが無難である。（吉田 1998: 148）

(2) の文法書の記述の前半部分からは，文頭での And のような等位接続詞の使用は，規範的ではないとみなされることが伺える。

（2）There is a well-known prescriptive reaction beginning an orthographic sentence with a coordinator. Nevertheless, in actual texts we quite frequently find coordinators in this position.（Biber et al. 1999: 83）

しかしながら（2）の後半部分の記述の通り，文頭のAndは実際の文章中に頻繁に生起する。文頭のAndは新聞，雑誌，そして学術的な文章といった書き言葉において目にすることが頻繁にある。

本稿の目標は，書き言葉における文頭のAndに関する先行研究であるBell（2007）の主張の問題点を明らかにした上で，次の（3a）-（3c）の見解を主張し，その妥当性を示すことにより，文頭でAndが使用されている文の特徴を明らかにすることである。

（3）a. 文頭のAndはLevinson（2000）のM推意（M-implicature）を生じさせる。
b. 文頭のAndはMann and Thompson（1988）がjointと呼ぶ一貫性の関係（coherence relation）が成立するというM推意を生じさせることがある。
c. 文頭のAndの直後に生起する文から得られる主要な情報は，先行談話から得られる情報であってはならない。

2節ではBell（2007）の見解を批判的に検討する。つづく3節では，文頭のAndの特性をM推意に基づいて説明する。4節はまとめである。

2. Bell（2007）

Bell（2007）はHalliday and Hasan（1976）とSchiffrin（1986, 1987, 2006）による考察を踏まえながら学術的文章を対象に文頭のAndの機能を探り，文頭のAndは次の（4a）－（4c）の何れかの機能を果たすと主張している。Bellはこの三つの機能のうち（4a）の機能が最も一般的だとしている。

（4）a. Andに後続する文が列挙されている項目の最後の項目であることを示すことによって他の談話単位との区別を明確にする。
b. 話題の展開によって議論を進展させる。議論の継続を合図する。
c. 先行する談話単位との間に断絶もしくは変化があることを示す。

（5）a. *Three meal-pattern categories were created based on their ability to provide meaningful comparison of eating behaviors: Consistent, moderately consistent, and inconsistent.*（My italics）. These categories are mutually exclusive and include all possible combinations of eating occasions. Respondents with a consistent meal pattern（n=538）consumed two or three meals（plus or minus snacks）on all 3 days of reported intake. Those with a moderately consistent meal pattern（n=726）consumed two or three meals（plus or minus snacks）on 2 of the 3 days of reported intake. **And** respondents with an inconsistent meal pattern（n=46）consumed only one meal（plus or minus snacks）or snacks on all 3 days of reported intake.[2)]

（*Families Economics and Nutrition Review*）（Bell 2007）

b. A small country in the Ricardian model, then, cannot lose from fragmentation so long

as *prices of final goods remain fixed*. **And** *fixity of prices* has a certain plausibility if the rest-of-world is integrated, as noted above.

（*North American Economics and Finance*）（Bell 2007）

c. He still imagines that his suffering is unique and fails to identify, metaphorically, with the bull in the arena or the fish on the line. He wanders the streets. He talks to himself. He is like some medieval fool setting himself on itinerant display.（**And** Ellison indeed invokes "the Fool's Errand," as we have seen.）

（*Anthropoetics*）（Bell 2007）

Bell は（4a）（4b）（4c）の機能を果たす文頭の And の例としてそれぞれ（5a）（5b）（5c）を挙げている。（5a）では，三種類の食事の傾向を表すカテゴリーに属する人それぞれが，三日間の調査の間，食事をとった日数と食事の回数を回答している。Consistent, moderately consistent の回答者についての陳述の後，And の後で最後に Inconsistent の回答者の陳述が提示されている。Bell の主張は，And によって後続する文が列挙の最終項目であることが示されるというものである。（4b）の機能を果たす例としては，直前の文ではじめて談話内に導入された要素が And に導かれる文の話題になっている例や，（5b）のように，直前で談話内にはじめて登場した要素と内容がほぼ同じ要素が And に導かれる文の話題になっている例が挙げられている。（5b）では，第一文の中の *prices of final goods remain fixed* と内容的にほぼ同じ *fixity of prices* が And に導かれている文において話題（topic）になっている。つまり，直前の評言（comment）中の要素が And に後続する文中の話題 になっている。（5c）は Bell が（4c）の機能を果たすと考える例である。Bell によると，この例では And に導かれる下線部の文は補足説明，追加情報になっていて，And に先行する文からの転換（shift）が認められるという。

次に Bell の主張の問題点を提示したい。最初の問題点は（4a）に関するものである。Bell がいうように，文頭の And によって And に後続する文が列挙されている項目の最後の項目であることを示す場合があることについて異論はない。しかしながら，（6）（7）のように，And に導かれる文に後続する文において列挙の最後の項目が提示されることがある。（4a）の主張に沿って考えると，S1. S2. And S3. という連鎖において，読み手は S3 が列挙の最終項目であることを予想するが，実際には S3 に後続する文が列挙の最終項目として生起することがある。（4a）はこうした例を説明することができないという問題がある。

（6）My family are living all over the world. My father is working as an engineer in Dusseldorf. My mother is a doctor in Beijing. And my brother is working for a bank in London. Our family's dog is living in Tokyo for his work as an actor. [3)]

（7）Easter is a Christian holiday and always falls on a Sunday in March or April. It celebrates Jesus Christ's return to life after his death. Arbor Day is for planting trees. And Yom Kippur is the traditional end to the Jewish High Holidays. Also there is Black Friday. That sounds terrible, doesn't it? However, Black Friday occurs the day after Thanksgiving. It is considered the start of the Christmas shopping season. There are

many bargains, and stores are crowded with shoppers. It is a good time to do one's Christmas shopping early! (*Focus on Reading!*)

(6) では第三文を読み終え，And を目にしたところで，読み手は直後に列挙の最終項目が生起すると予想する。ところが，And に後続する my brother is working for a bank in London は列挙の最終項目ではなく，真の列挙の最終項目は最後の文の Our family's dog is living in Tokyo for his work as an actor. である。(7) に関しても，第三文を読み終え，And が目に入った時点で読み手は直後に列挙の最終項目が生起すると予想する。しかしながら列挙の最終項目は，直後の Yom Kippur is the traditional end to the Jewish High Holidays ではなく，第五文の Also there is Black Friday. である。このように，And に導かれる文の後に列挙の最終項目となる文が生起する場合がある。したがって「文頭の And は後続する文が列挙されている項目の最後の項目であることを示す」と断定することはできない。

二つ目の問題点は用語の定義, 解釈に関わる。(4b) の「話題の展開によって議論を進展させる」という箇所と (4c) の「先行する談話単位との間に断絶もしくは変化がある」という箇所に関して，どのような場合に「話題を展開させている」,「先行する談話単位との間に断絶もしくは変化がある」といえるのかが不明確であるという問題である。この点が不明確なため, 例えば (8b) (9b) と (10b) (11b) の容認度に違いがある理由を適切に説明することができない。

(8) a. I like ice cream. <u>I really have a sweet tooth</u>.

(Mann and Thompson 1986)

b. I like ice cream. #<u>And I really have a sweet tooth</u>. [4)]

(9) a. He sure beat me up. <u>I really took a thrashing from him</u>.

(Mann and Thompson 1986)

b. He sure beat me up. #<u>And I really took a thrashing from him</u>.

(10) a. I love to collect classic automobiles. <u>My favorite car is my 1899 Duryea</u>.

(Mann and Thompson 1986)

b. I love to collect classic automobiles. <u>And my favorite car is my 1899 Duryea</u>.

(11) a. Karen is so photogenic. <u>Her smile is perfect</u>.

(Mann and Thompson 1986)

b. Karen is so photogenic. <u>And her smile is perfect</u>.

文頭の And が (4a) − (4c) の何れかの機能を果たすという見解が妥当だとすれば，何れの機能も果たさない場合, 文頭の And は容認されないものと思われる。(8b) (9b) が容認不可能なのは，And に後続する文が列挙されている項目の最後の項目であることを示していないことに加えて，第一文と第二文の間で話題の展開による議論の継続および談話単位の断絶や変化の何れも認められないためと説明される筈である。(8b) (9b) の第二文は何れも第一文についての詳述 (elaboration) である。だとすれば，第二文が第一文についての詳述の場合には，文間で話題の

展開による議論の継続および談話単位の断絶や変化の何れも認められないと考えることで（8b）（9b）と（10b）（11b）の容認度の違いを説明することは可能であろうか。答えは否である。それは（10b）（11b）のように第二文が第一文についての詳述であっても容認可能な場合があるからである。Bell の見解に即していうならば，（10b）（11b）の文頭の And は（4b）もしくは（4c）の機能を果たしているはずであるが，なぜ何れかの機能を果たしているといえるのか。その理由は用語の定義が明確でないため不明である。

三点目の問題点も（4b）（4c）に関係する。Bell は（4b）では文頭の And が議論の継続を合図すると主張する一方，（4c）では先行する談話単位との間に断絶もしくは変化があることを示すと主張する。しかしながら，談話の「継続」と「断絶」は相反する状態である。相反する状態を合図する機能を同一の語が果たすというのは，読み手に負担のみを負わせることになり不自然に思われる。

3. 文頭の And の特性

3.1. M 推意と文頭の And

M 推意は，Grice（1975）の「様態の格率」に基づく推論である。冗長な普通でない有標の表現が用いられている場合，普通でない状況が述べられているという推論が導出される。Levinson（2000）はこのような推論を M 推意と呼ぶ。他方簡潔な表現が用いられている場合，ステレオタイプ的な事態を表しているという推論が導出される。Levinson（2000）はこのような推論を I 推意と呼ぶ。（12a）（13a），（12b）（13b）はそれぞれ M 推意，I 推意が生じる場合の具体例である。

（12）a. Sue made the car move.
M++> Sue moved the car in some abnormal way, e.g., by pushing it.
b. Sue moved the car.
I ++> Sue moved the car by driving it, by using the engine.
（Levinson 2000: 141）

（13）a. ただちに健康への影響はありません。
M++> 将来的には健康への悪影響があるかもしれない。
b. 健康への影響はありません。
I ++> 将来的にも健康への悪影響はない。

（12a）のような冗長な表現からは「何らかの普通でないやり方で，例えば車を外から押すといった方法で車を動かした」という推意が生じる。また何らかの健康被害が懸念される状況で，（13a）のように「ただちに」という余分な表現が使用されると「将来的には健康への悪影響があるかもしれない」という推意が生じる。[5] これに対して，（12b）のような通常の簡潔な表現からは「エンジンを使って，運転して車を動かした」という推意が生じる。同様に（13b）のような通常の簡潔な表現からは「将来的にも健康への悪影響はない」という推意が生じる。

文と文との接続に関しては，S1. S2. という接続詞なしの文の連鎖と S1. And S2. という文の連鎖を比べた場合，後者は冗長といえる。また，生起頻度の観点からみても，後者は前者に比べ圧倒的に少ない。したがって，S1. And S2. という文の連鎖は冗長な有標表現といえる。文頭の And の有標性に関しては Bell（2007）も（14）のように指摘している。

（14）With regard to “zero”, SIA is clearly the marked option.

Bell（2007）は文頭の And に導かれる文の有標性と（4a）の「後続する文が列挙されている項目の最後の項目であることを示すことによって他の談話単位との区別を明確にする」という文頭の And の機能とを結びつけてはいるが，文頭の And が S1. S2. という接続詞がない文の連鎖とは異なる機能を果たすと指摘するにとどまっている。つまり文頭の And の意味が推論によってひきだされるという指摘はなく，（4a）の機能が会話の推意と密接に関連するという点に関する言及はない。冗長な，普通でない有標の表現が用いられている場合，普通でない状況が述べられていると推論する。本稿ではこの M 原理からの帰結に基づいて，文頭の And は M 推意を生じさせると主張する。

では文頭の And を目にした読み手は，普通でないどのような状況を推論するのか。本稿ではその普通でない意味として読み手は joint という一貫性関係が成立すると推論することがあると主張する。joint という一貫性関係は次の二つの点で有標の普通でない意味上の関係であるといえる。一貫性関係とは文と文の意味上のつながりを表す関係をいう。意味上のつながりというと，恐らく通常は二文間の意味関係と理解されるのではなかろうか。ところがこの joint という一貫性関係は，三文以上の文間でも成立する。三つ以上の文間の関係を表す一貫性関係は，Mann and Thompsopn（1988）で 23 種類に分類されている一貫性関係の中でこの joint だけである。したがってこの一貫性関係は通常とは異なる意味関係といえる。また，その意味関係の特異さは Mann and Thompsopn の（15）の主張からも伺える。

（15）The schema［called JOINT］is multinuclear, and no relation is claimed to hold between the nuclei.（Mann and Thompsopn 1988）

この関係は，互いに主従関係のない核という資格をもつ文間の関係で，互いの間に関連がない。一方 joint 以外の一貫性関係は，概して隣接する文間に成立し，互いに意味関係が認められる。したがて joint で結合された文間での意味上のつながりの希薄さは他の一貫性関係にはみられない特徴といえる。（3b）に該当する場合の具体例は（5a）である。（5a）では第三文と第四文でそれぞれ Consistent，Moderately consistent の回答者についての陳述が列挙されている。読み手は第四文の直後に生起している And を目にした時点で，次に列挙の最終項目となる文が生起すると推論すると主張したい。

ところで（3b）の主張に基づいて，（6）（7）のように，And に導かれる文に後続する文において列挙の最後の項目となる文が生起する例は，どのように説明することができるのであろうか。この疑問に対しては，And に導かれている文の後続文によって，推意が取り消されたと解

釈されると説明したい。M 推意のような会話の推意は取り消し可能という特徴をもつ。たとえば，(13a) は「ただちに健康への影響はありませんし，将来的にも影響はありません」というように，後続文脈によって取り消したり，「先日『ただちに健康への影響はありません』と申し上げましたが，将来的に健康への影響がでる恐れがあるという意味で申し上げたわけではありません」というように，推意を話し手がことばによって否定することで取り消すことが可能である。(6) (7) は後続文脈によって推意を取り消している例である。(6) の読み手は And を目にしたところで，直後の文までの一連の文が joint の関係でつながるという推意を把握するが，最後の文を読んだところでこの推意は取り消される。この例では最後の文で家族の範疇を犬にまで広げていることが伝えられるので，推意の取り消しが受け入れやすいのではないかと思われる。[6] また，(7) の場合は読み手に敢えて推意の取り消しをさせることで，後半部分の話題である Black Friday に注目させているように思われる。(16a) の下線部の後続部分を変更した (16b) も (6) (7) 同様，後続部分によって推意が取り消されている例である。

(16) a. There are generally formal connections between sentences in a text, which are collectively referred to as *cohesion*. Cohesion can involve vocabulary links between sentences – repetition of words, or use of related words. It can also involve *connectors* which mark various temporal, spatial and logical (in a broad sense) relationships between sentences. <u>And it can involve *reference* – words which refer back to an earlier sentence or, less often, forwards to a later one</u>. I shall call any formal feature of a text which has a cohesive function, which cues a connection between one sentence and another, *a cohesive feature*.... (*Language and Power*)

b. There are generally formal connections between sentences in a text, which are collectively referred to as *cohesion*. Cohesion can involve vocabulary links between sentences – repetition of words, or use of related words. It can also involve *connectors* which mark various temporal, spatial and logical (in a broad sense) relationships between sentences. <u>And it can involve *reference* – words which refer back to an earlier sentence or, less often, forwards to a later one</u>. In addition, it can also involve ellipsis, which occurs when, after a more specific mention, words are omitted when the phrase needs to be repeated. I shall call any formal feature of a text which has a cohesive function, which cues a connection between one sentence and another, *a cohesive feature*....

(16b) の読み手は結束性をもたらす要素の最終項目として「指示」が挙げられているという推意を得る。しかしながら結束性をもたらす要素として「省略」に言及している後続文によって，この推意は取り消されているとみなされる。

3.2. 文頭の And の使用条件

本節では文頭の And の使用条件として，文頭の And に後続する文から得られる主要な情報は，

先行談話から得られる情報であってはならないという見解を提示したい。(8b)(9b)と(10b)(11b)の容認度の違いと(17)の下線部の容認度の違いは，この条件を満たしているか否かによる。(8b)と（10b）（11b）に関しては，条件を満たすことが可能か否かは，第一文と第二文の間に慣習的前提が成立するか否かによる。慣習的前提とは，「一般常識に基づいて『そういうことなら，普通はこうであるはずだ』と［慣習的に成立することが推論される事柄（加藤 2004: 82)」のことを指す。クラッシックカーの収集が好きな人のお気に入りの車が一般にドゥリエーである訳ではない。同様に，写真写りがよければ笑顔が申し分ない訳でもない。したがって（10b）（11b）の第一文と第二文の間には慣習的前提は成立しない。つまり第一文の内容から第二文の情報は得られない。これに対して，アイスクリームが好きであれば，甘い物好きであろうという推論は一般的なので，(8b）の第一文と第二文の間には慣習的前提が成立しているといえる。つまり，第一文の内容から第二文の情報を得ることができる。このような場合，第二文の文頭をAndではじめることはできない。(9b）の第一文と第二文はともに「発話者が彼にぼこぼこに殴られた」と同内容であり，第二文の情報は第一文から得ることができるといえるので，容認不可能であるとみなされる。

（17）English is unique. It is the only language in the world that has more non-native speakers than native speakers. While Chinese has more than a billion speakers, the great majority of these speakers are themselves Chinese. (#And / In contrast) English has only about 300 million native speakers (Americans, Australians, British, Canadians, New Zealanders and South Africans, for example), but has more than 300 million non-native speakers. It has been estimated that more than 300 million people are learning English in China alone. In India, where English is an official language, there are over 100 million speakers. (*English across Cultures*)[7]

(17）の下線部の文から得られる主要な情報は「英語の話し手は母語話者よりも非母語話者の方が多い」という情報である。この情報は第二文から得ることができる。

なぜ文頭のAndに後続する文から得られる主要な情報は，先行談話から得られる情報であってはならないのであろうか。この疑問に対しては，有標の形式を用いることで読み手に普通でない状況が伝達されることを期待させながら，その期待を裏切っているためと回答したい。文頭のAndの使用によってM推意が生じるが，談話上の既知情報が伝達されている場合，読み手は普通でない状況が伝達されているとは理解しないために文頭のAndの使用が許容されないことが考えられる。

前節では，文頭のAndは，直後の文までの一連の文にjointという一貫性関係が成立するというM推意を生じさせることがあることを指摘したが，文頭のAndはそれ以外でどのようなM推意を生じさせるのであろうか。文頭のAndの使用によって読み手が何らかの変化を認識することになるというM推意が生じることがあると考えたい。その変化の例として談話の流れの変化を挙げることができる。談話の流れの変化はある種の有標の事態である。談話の流れはLambrecht（1994）のいうtopicの変更がある場合やGiora（1997）のいうdiscourse-topicの変

更がある場合に変わるとみなしたい。

（18）TOPIC: A referent is interpreted as the topic of a proposition if in a given situation the proposition is construed as being about this referent, i.e. as expressing information which is relevant to and which increases the addressee's knowledge of this referent.
（Lambrecht 1994: 131）

（19）The discourse-topic is a generalization, preferably made explicit, and placed in the beginning of the discourse. It functions as a reference point relevant to which all incoming propositions are assessed and stored. （Giora 1997）

（10b）では話題が「書き手のお気に入りの車」に，（11b）では「カレンの笑顔」に変わっていると解釈することができる。Bell（2007）が話題の展開とみなす（5b）においても「最終財貨の価格の固定」に話題が変わっていると解釈可能である。書き言葉では，discourse-topic の変更はパラグラフを変えることによって示されるが，Biber et al.（1999: 84）は，and のような等位接続詞がしばしばパラグラフの境界に生起することを指摘している。文頭の And の直後に既知情報が生起している（8b）（9b）（17）の下線部では談話の流れの変化はもちろん，他の点でも読み手が何らかの変化を認識するとは考えにくい。

4. おわりに

本稿では文頭の And は，joint という一貫性関係の成立や談話の流れの変化を M 推意させることがあると主張した。また，文頭の And の直後に生起する文から得られる主要な情報は，先行談話から得られる情報であってはならないことを示した。なお文頭の And は何らかの変化を読み手に合図することがあるという見解を提示したが，変化の中に談話の流れの変化以外の変化が含まれる可能性は否定していない。談話の流れ以外の変化が考えられるとするならばそれは何か。この疑問に関しては，今後の検討課題としたい。

注

＊留守番電話のメッセージを再生する際，「ああ児玉です」というお声が聞こえてきそうな気が今でもいたします。児玉先生は不肖な教え子のことをいつも気にかけてくださり，よくお電話をくださいました。多忙を極める中，児玉先生が私のために莫大な労力と貴重なお時間を使ってくださったことに，感謝してもしきれない思いがあります。と同時にそれに対して十分お応えできていない申し訳なさも強く感じております。児玉先生から受けた御恩に報いるためにも，先生が御著書や御論文でお書きになられたことやこれまでに先生から賜った御助言について改めて深く考え，研究を大きく進展させることができるよう，力を尽くしたいと思います。

1）英語の授業において文頭の And の使用を控えるよう指導が行われていることは，（ｉ）に示す辞書の記述からも伺うことができる。

（ｉ）It is still widely taught and believed that conjunctions such as **and**（and also **but** and **because** ）

should not be used to start a sentence, the argument being that a sentence starting with **and** expresses an incomplete thought and is therefore incorrect.

（*Oxford Dictionary of English, Third Edition*）

2）用例中の下線は筆者によるものである。

3）出典が明記されていない用例の容認度の判断は，カナダ出身の英語母語話者による。

4）用例中の＃は当該の談話内では不適格であることを示す。

5）http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/62347_13915455_misc.pdf を参照。

6）インフォーマントによると，（ｉ）も容認可能ではあるが，（6）の方が容認度がより高いとのことである。

（ｉ）My family are living all over the world. My father is working as an engineer in Dusseldorf. My mother is a doctor in Beijing. <u>And my brother is working for a bank in London</u>. My sister is teaching Japanese in Seoul.

7）出典の第四文では In contrast が用いられている。

参照文献

Bell, David.（2007）“Sentence-initial *And* and *But* in a Academic Writing,” *Pragmatics* 17（2）183-201.

Biber, Douglas et al.（1999）*Longman Grammar of Spoken and Written English.* Harlow, England, Longman.

Giora, Rachel.（1997）“Discourse Coherence and Theory of Relevance: Stumbling Blocks in Search of a Unified Theory.” *Journal of Pragmatics* 27:17-34.

Halliday, M. A. K., and Ruqaiya Hasan（1976）*Cohesion in English*, London, Longman.

Mann, William C., and Sandra, A. Thompson.（1986）“Relational Propositions in Discourse,” *Discourse Processes* 9: 57-90.

Mann, William C., and Sandra, A. Thompson.（1988）“Rhetorical Structure Theory: towards a Functional Theory of Text Organization,” *Text*, 8（3）. 243-81.

Grice, H.P.（1975）“Logic and Conversation,” Cole, P. and Morgan, J. eds. *Syntax and Semantics* 3: Speech Acts, 41-58. New York, Academic Press.（清塚那彦訳 1998.『論理と会話』東京：勁草書房）

加藤重広 .（2004）『日本語語用論のしくみ』東京：研究社 .

Lambrecht, Knud.（1994）*Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus and the Mental Representation of Discourse Referents.* Cambridge: Cambridge University Press.

Levinson, Stephen C.（2000）*Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature.* Cambridge, MA: MIT Press（田中廣明・五十嵐海理訳 . 2007.『意味の推定』東京 : 研究社 .）

Schiffrin, Deborah（1986）“Functions of “and” in Discourse,” *Journal of Pragmatics* 10, 41-66.

Schiffrin, Deborah（1987）*Discourse Markers.* Cambridge University Press, Cambridge.

Schiffrin, Deborah（2006）“Discourse Marker Research and Theory: Revisiting *and*,” *Approaches to Discourse Particles,* ed. By Kerstin Fischer, 315-338., Elsevier, Amsterdam.

吉田友子 .（1998）『アカデミックライティング入門―英語論文作法―』東京 : 慶應義塾大学出版株式会社 .